

密猟区

小説 ミグ25亡命事件

中 薊 英 助



密猟区

小説 ミグ25亡命事件

中 薗英助

<著者紹介>

1920年福岡県生まれ。

ジャーナリスト生活10年の後、作家となる。

<主要作品>

『死電区間』(現代社, 1958)

『密航定期便』(講談社文庫)

『密書』(講談社文庫)

『無国籍者』(『炎の中の鉛』改題, 講談社文庫)

『夜の培養者』(読売新聞社, 1968)

『中蘭英助・国際スパイロマン全6巻』(講談社, 1972)

『裸者たちの国境』(河出書房新社, 1975)

『ヨーロッパ無宿』(日本経済新聞社, 1976)

『エサウの裔』(河出書房新社, 1976)

『桜の橋』(第三文明社, 1977)

密猟区

小説 ミグ 25 亡命事件

昭和五十四年三月二十日 一刷

著者 中 蘭 英 助

© Eisuke Nakazono 1979

発行者 黒 川 洸

発行者 日本経済新聞社

東京都千代田区大手町一―九―五
電話(〇三)三〇―〇二五 振替東京三三三三

印刷・第一印刷／製本・大口製本

0093-9739-5825

目次

第一章	消えた航空地図F 10	5
第二章	マルクス通りの青年将校	30
第三章	怪鳥ミグ二五強行着陸す	58
第四章	誘拐・監禁・尋問	89
第五章	特等情報	117
第六章	ベレンコ暗殺未遂事件	156
第七章	情報マンたちの神聖同盟	196
第八章	逆スパイか亡命者か	220

装丁 斎藤和雄

カバー・表紙の地図写真は米国防衛地図作成局
航空宇宙センター発行の ONC F-10

密
猟
区

小説
ミ
グ
25
亡命事件

第一章 消えた航空地図 F 10

1

五千トンのジェルジンスキー号は、霧笛をしきりに鳴らしていた。

その季節には珍しく、霧のこめた海を、目的地のナホトカ港外にさしかかったのである。

横浜を出て二昼夜、日ソ定期航路の客船は太平洋側から津軽海峡を抜け、日本海をほぼ真西に横切つて、五十三時間の航海を終ろうとしていた。

メイン・デッキ左舷のツーリスト・クラス A 三二〇号室で、スツーカーに荷物を詰め直していた遠宮涼太郎とみやうりょうたろうの手から、一枚の地図が舞い落ちた。

同時に、鋼鉄製のドアに、ノックの音が起った。

「はい、どうぞ」

遠宮は応じながら、ひろいあげた地図を、黒のタートル・セーターの下に突っこもうとした。

そこには、すでに同種の折りたたまれた地図四枚が部厚く同居していて、落着きを失った新たな地図二枚が、すべり出してしまった。

「遠宮さん、早くデッキへ出ましょうよ」

ドアを開けたのは、矢杉久美子だった。

どこを見まわしても金属ばかりの船内で、花が開いたように笑っていた。二日間、サン・デッキで焼いたほどよい陽焼けが、痩せぎすの彼女に、南島生れの娘のような健康な魅力をあたえていた。

「しかし、ぼくはまだ上陸準備ができていなくて」

「陸の影が見えてきたのよ。あれを見てきてからでも、きつと遅くはないと思うけど」

「陸地が……？」

「そうよ。あ、遠宮さんが手に持ってらっしゃるの、シベリアの地図でしょう。それ、持って行きましょうよ」

久美子は勝ち誇ったようにいい、ドアを大きく押し開いた。

「さあ、行っちゃった！ 船が港に入ってからだって、上陸までには一時間、二時間かかるから、心配ないって……」

寝ているとばかり思った上段ベッドの孫田までが、カーテンごしにだみ声をかけてきた。

孫田豊は親切な、というよりも遠宮にとって理解に苦しむ体の男である。四十代も半ばすぎということで、十以上は確実に自分の方が若いとさとした彼が、下段のベッドと交換しようかと提案したことがあるが、ていちょうに断わられてしまったのだ。

「わたしや、この船、二度目でね。上の方が、人の出入りも気にせず、酒くらって寝てられるから、好きなんですわ」

アッパー・デッキ右舷の遊歩用デッキには、うすい乳色の霧が、しきりに吹きつけていた。

船室を飛び出してきて、遊歩用デッキに重なりあうようにして集った船客たちは、せまってくる陸

地を眺めて、感嘆の声をあげた。

「すごい断崖絶壁だよなあ」

「恐ろしいような黄土色だね」

「あら、ずっと向うには、青い山がそびえて見えるわ」

ロシア娘のようにスカーフを頭にかぶった久美子が、遠くを指さしながらいった。

霧は陸地に近づくにつれて切れはじめ、黄色い断崖の彼方には、たしかに青い台形や錐形の山々が見えた。

「あれは、沿海州を海に沿って南北に走ってるシホテ・アリン山脈ですよ。まあ、南部のこちらへんは、せいぜい標高七、八百から千メートルぐらいですけどね」

「やっぱり、地理の先生だわ。くわしいのね」

久美子が、遠宮をふり仰ぐようにしていった。

彼は、手にした半開きの地図を、空にうちふって見せた。

「地図に出てるから、見れば誰だってわかるけど……」

「行けども行けども、シベリアの大地には、家も人も現われてこない、というみたいだわ」

「家なんか、ありやしませんよ。ここはまだ、ほんもののシベリアじゃないが、この極東よりもはるかに開発の進んでるイルクーツク周辺の東シベリアの人口密度が、一平方キロメートルあたり一・七人という統計がある。日本の人口密度、知ってますか。一平方キロあたり二八〇人ですよ。東シベリア地域と比較しても約百七十倍。日本よりも面積で三十六倍もある、極東をふくめたシベリア全体と比較すれば、二百倍くらいの人口になるかも知れない。日本人の目には驚異だが、ここじゃ、ところによっては五十キロ、百キロ行っても、家どころか人っ子一人会わなかったって当然なんですよ」

彼は、少々ばかりの知識をひけらかしていたのではない。知識を、いま実見によって確かめられるということに、彼自身興奮していたのである。

遠宮源太郎は、私学では名門といわれる、洋光学園高等部の地理教師である。

三十三歳だが、いまだに独身だ。

洋光学園の中学、高校から教育大理学部の地学科へ進んで、自然地理を専攻し、卒業と同時に母校へ迎えられた。正確にいうと、社会科の地理A教師である。もう教師歴十年というベテランで、その人生にもこれという挫折を何一つ経験したことのない、順調なコースを歩んできたことになる。

いまだに独身でいるのも、格別に理由あつてのことではない。強いていえば、その方面におく手だったのと、世田谷区北烏山の自宅に、嫁選びに気難しいところのある母親と二人だけで暮さなければならなかったせいである。

むしろ、不思議といえば、地理教師のくせに、外国旅行へ出かけてきたのが初めてだということであらう。

どこか、あまり観光客のわいわい押しかけて行かない土地を選んで、現地研修フィールドワークをして見たいというのが念願だった。

なかなか、その機会はこなかった。教師の雑用は意外に多く、たとえ休暇中でも、長期にわたって孤独になることを許さない。

国内では、連休はもちろん、わずかなひまをもぬすんで、北は北海道北端の宗谷岬から南は山猫で名の出た八重山諸島の西表島セーボまで踏破しつくした。地学専攻の教師たちとグループ研修したり、学園の生徒を連れて行くこともあったが、どちらかといえば、彼は気楽な一人旅を愛した。

のんびりと一人息子で育った性格が、そうさせたのかも知れない。人事に大らかで、物事を意に介

さないうところのある反面、傷つきやすい繊細な心の持主だったのである。

一学期の期末試験の最中、一般高校だと校長先生に当る平林高等部長に呼ばれた。

「遠宮君、夏休みのプランは、もう決まったかね？」

「夏休みのプランといわれますと？」

平林は、遠宮が高校時代、英語を教わった恩師である。懐かしいような恐いような、複雑な気持でいつも相対することになる。

「きみ自身のだよ」

「は？」

「今度ね。教師の研究旅行に補助金が出ることになったんだよ。年一回、若干名ということだが、どうかね……きみもプランを出して見ちゃ」

学校公認で出かけられるとなると、補助金の額はともかく、休暇中のさまざまな行事、補習授業の類から公然と抜けることができる。

踊り上って喜んだ遠宮は、さっそく方々の旅行社をまわって、まだ間にあうツアーのパンフレット類を集めた。単独旅行を計画しなかったけれど、夏休みは目前にせまっており、旅行準備の時間が足りなかった。

たとえ、セット・ツアーでも、その中で単独の現地研修フィールドワークを組める余地のある銘柄はないか。それが目当てだった。

遠宮は、二週間のシベリア旅行を選んだ。

シベリア開発問題研究会という団体と、六本木にあるクラウン旅行社という旅行代理店とが組んで売り出したツアーにまだ欠員があつて、すべりこめたのである。

一行は女性十三名を入れて総勢三十四名。それに、クラウン旅行社から派遣された金尾という添乗員一名を加えただけの、手頃な人数だった。

金尾はロシア語がたんのうであつたが、ジェルジンスキー号に乗船早々から、ソ連対外旅行公社との折衝に追われ、一行はまず言葉からして通訳なしの自前でやるはかなかった。それはいいとして、旅行中、とくにシベリアの自然や開発についての講義一つあるわけじゃないとわかつたときには、参加者の多くに打撃をあたえた。

遠宮は、かえって開放感を味わっていた。

インスタントではあるが、学校当局に対しての名目は立つた。あとは、自分のやりたいようにやればいい。

矢杉久美子もそうだ。

彼女は、短大を出て丸の内の二流どこの商社に勤めはじめてもう四年というキャリア・ウーマン。その商社がソ連東欧貿易も手がけているところから、いくらか仕事上の必要もあり、日露語学院の本科に一年半通つて、カタコトの話もできるようになっていた。そこへ、戦争未亡人の叔母、寺岡節子に旅費持ちでのおしよばんを誘われたから、文句なしに参加することにしたのだ。

観光旅行にお説教は不要である。寄合い世帯の参加者たちは、そう思い直しはじめた。

横浜を前々日の午前十一時に出航して、一夜明けたところから、外国旅行へ出たというよそゆきの緊張はほぐれ、すっかりうち溶けあつていた。それが、いよいよ上陸となると、誰彼の見境もなく、たがいに喜びを分かちあいたいという気持にさせたのであろう。

「おおっ！　すごい地図持ってますね」

遠宮の背後から、猿臂をのばしてきて、ひょいと地図をひったくつたのは土屋であつた。

土屋は東城大の大学院で、社会心理学の博士課程を取っている大学院生というふれこみだった。だが、年も三十歳前後と見え、学生というよりか助手、もしくは講師風で、遠宮は彼と向きあっているといどく圧迫感をおぼえた。

それは一つには、久美子の行くところへは、どこへでも追っかけてきて顔を出すという彼の積極性と、何度か鉢合せしたせいもあるだろう。

「や、困るね。それ、持ってっちゃ」

「へーえ！ 驚いたな、こりゃあ。アメリカ空軍が作った航空作戦用の航空図じゃないですか」

「返してくださいよ。早く」

「へいへい、ジム！ これ見ろよ、これ」

土屋は遊歩用デッキを通りかかった、参加者中ただ一人の長髪の外人をつかまえて、地図を見せようとした。

神田の英語学校教師、ジェームズ・サンダースだ。用があつて船尾へ急いでいたらしく、彼はノーノーといいながら、興味なさそうに肩をすくめ、毛むくじゃらの手をふって、道を開けろというそぶりをしただけだ。

「おたく、こんなもの持ってきて、どうするんです？ 古風な人だな。遠宮所蔵之印だなんて、ハンコまでべったりおしちやつてさ。ソ連に入国して、見つかったら、大変なことになりますよ」

土屋はなおもいいながら、ふいに顔色を変えて地図を後ろ手にかくし、船室の壁にびったりと背をくっつけた。

遠宮と土屋の間を、顔馴染になったジェルジンスキー号の事務長が、レスラーのような両肩をふりふり、笑顔を左右に送って通りすぎて行った。

「ナホドカ！ ナホドカ！ サヨナラ……バイバイ！」

2

遠宮は、それがすばらしい地図だと知ってはいても、土屋のいろいろな心配を、本気でしたことは一度もなかった。なぜ大騒ぎするのか、わからなかった。

杞憂。もしくは、いわれのない恐怖という気がした。

彼はたしかに、米国中部のミズーリ州セントルイスの空軍根拠地^{ステーション}にある防衛地図作成局航空宇宙センターが発行したONCシリーズ^{オング}の航空地図、五図面を所持していた。

ONC・D6。ONC・E7。ONC・E8。ONC・E9。ONC・F10。

ONCというのは、OPERATIONAL NAVIGATION CHARTの略で、航空操縦要図という意味であろう。それに付随するD、E、Fは東シベリアから外モンゴル、沿海州、中華人民共和国、サハリン、および北海道と本州東北の一部をふくむ広汎な地域を、それぞれ緯度線によって地表上に横割りした分類記号である。

つまり、それら五図面^{シート}さえ携帯していれば、今度踏破する予定の旅行先は、充分間にあう範囲を手したのである。

彼がナホトカ港に上陸直前、スリッパの中から取り出し、遊歩デッキで現地^{フィールド}研修よろしくひろげて見たのは、そのうちF10の図面^{シート}だった。

北は北緯四十八度線の北に位置するハバロフスクから、南は北緯四十度線のこれもすぐ北に位置する秋田県能代あたりまで。西は東経百三十度線の中国東北部から、東は東経百四十七度線のエトロフ、クナシリ両島までをふくむ。

この間に、極東と呼ばれる沿海州南部のはぼ全域と、サハリンの南半分、それに北海道全島がふくまれている。

日中ソ三国国境地帯の全域が写し取られているのだ。

よく見ると、航空地図だけあって、全国各地の飛行場は、民間であれ軍用であれ、滑走路の規模、長短によって、主要および補助飛行場の別を明瞭に区別されたマークを入れられ、滑走路の方向、型まで示されている。

たとえば、軍港ウラジヴォストクの北部にあるウグロヴォエ北西飛行場は、内陸部から湾岸へ向う北北東へ、二千百メートル以上の滑走路を持っている。また、ウスリースク北方のウオズドヴィジェンカ飛行場には、まったく同方向の南南西へ、約二千七百メートルおよび約三千六百メートルの長大な滑走路二本がある。

それらは、五十万分の一描法で示される六千フィート直径の円形マークと、その円形マークを串刺しにつらぬく滑走路線の長さとを、コンパスでたどり、あるいは比較して、簡単に方角や数値を得られるようになっているのである。

彼はじっさいに、二つの飛行場にコンパスを当てて見た。

すると、コンパスの足を刺した円形マークの円の中心は、実測された飛行場のホンモノの正位置を示すというのだから、考えようによっては、まことに剣呑な話である。この航空図を所持しさえすれば、いかなる種類の軍用航空機も、容易に銃撃あるいは爆撃の照準を設定することができるのである……。

しかも、陰影法と段彩法とを併用して、見事に表現された地形の立体感、航空機上から肉眼で見た地表の実景に近づけ、似せてあるようである。そのために、偵察衛星から撮影された精密な写真が

利用されたことは、まちがいなからう。

いわゆる戦無派の遠宮には、戦闘員の生理など察知できるわけもない。

だが、じっと眺めていると、仮想敵国の上空を飛行中の軍用機の乗員が、地表と地図とを見くらべながら、はやる心を押さえている胸の動悸まで、ゾクリとするように身近な迫真力を以て思い浮かべられるのであった。

遠宮は、その地図を手に入れたときの感動を、忘れはしなかった。

若者たちの街ですっかり有名になってきた渋谷の公園通りにある、パネル・ストアーで発見したのである。

五階に世界地図を専門にしている売り場、マップ・コーナーのあることは聞いていたけれど、初めはそれほどの期待はしていなかった。シベリア旅行を計画したとき、もしや何か掘出し物でもと思って、試しに足を運んで見たまでである。

学校が青山なので、渋谷は通り道だが、パネル・ストアーへ行ったのはひさしぶりだった。

「こりゃあ、まるでヨーロッパかアメリカの出店だな」

遠宮は、その変り様にびっくりした。

店は、外国製品の洪水に占領されていた。店の中を歩いている人間だけが、日本人だった。若い男女の着るものも、身に付けるものも外国製品が多かったから、正確にいえば生れたまんまの裸身だけが日本人なのだ。

「いまの日本人は、一億一心、火の玉でドル減らしに踊らされてるようなもんさ」

といった、皮肉屋の岩坂という、社会科の政治経済を担当している五十代の教師の言葉が思い出された。